

リオタルの美学と二つの「世界」

東京大学 浅野 雄大

後期の J-F・リオタルは「崇高」を中心として、独自の美学的思索を展開した。しかしその先行研究では崇高の美学の「呈示不可能なもの否定的呈示」という枠組みこそ注目されてきたが、彼が乗り越えようとしていた美の美学が呈示不可能なものどう関わるかはあまり語られることはない。ミルンはリオタル美学における美の位置付けを考察することで、美と崇高の関係を共通感覚と主体の形成という観点から正確に位置付けている(P. Milne, "In Statu nascendi : Subjectivity and the Beautiful in Lyotard", 美學 (미학) 약어 : 미학 , vol. 86, no. 4, 2020, pp. 137-172)。彼の考察

は専らカント美学の枠内における両者の関係を扱っているが、より広がりを持たせるには技術や資本主義の発展に伴うメタナラティブの失墜という彼の技術社会論も考察の範囲に入れる必要がある。

ところで美から崇高への移行には二つの世界が大きく関わっていることは見過ごされている。一つは古典美学的世界であり、もう一つはテクノサイエンス的世界である。前者は人間本性やその歴史性に基づいた一元的な世界であり、それは統制的理念によって可能となる。後者は産業資本主義の発達に伴って前者の世界が崩れ去った後に訪れる人間が周縁化された世界であり、無限の富と力という理念が統制している。

本発表ではリオタルが主張する美から崇高への移行を、古典美学的世界からテクノサイエンス的世界への移行という見取り図で捉え直すことを目的とする。彼は『非人間的なもの』(Lyotard, *L'inhumain : causeries sur le temps*, Galilée, 1988)におけるいくつかの論考で二世界の移行を論じており、そこで美の美学を前者に、崇高の美学を後者に結びつけている。

しかし事はそう単純ではない。なぜなら、彼の移行論には以下のような入り組んだ議論が含まれているからである。まず、美の美学は社会的・政治的パラダイムを有機化する古典美学的世界に帰される一方で、それが「達成 [achèvement]」されるのはテクノサイエンス的世界においてであり (ibid., p. 118)、二つの世界の間には単なる断絶だけではなく、特殊な連続性が存在している。そして崇高の美学に関しては、それがテクノサイエンス的世界に合致していると同時に拒否しており (ibid., p. 124)、崇高は産業資本主義の原理に収斂していくわけではない。このように複雑な顛末を辿る美から崇高への移行は、先に示した二つの世界の分析によって整理することができる。よって本発表は、それぞれの世界で働いている理念の性質を分析し、両者を整理しながらリオタル美学における美と崇高を位置付けるものだ。